

勝声生

朱母し

二度榴

太阪市南区麩谷中之丁

加島屋清助



澤井長天鑑

增補 佐和利集 初編

浄瑠璃 根本鑑

一名 浄瑠璃集

浪華清書堂版



古

目録

- 一 度 山
- 二 松 代 義 七
- 三 先 代 義 七
- 四 双 蝶 々
- 五 一 の 谷
- 六 白 石 嘲
- 七 八 陣 守 藩 城
- 八 新 款 文
- 九 新 顔 目 記
- 十 糸 の 統 座 の 子

新 簾 柳 の 殿
 酒 座 の 殿
 政 界 志 我 の 殿
 橋 弁 の 殿
 陣 座 の 殿
 揚 や の 殿
 心 清 女 侍 の 殿
 野 崎 村 の 殿
 宿 座 の 殿
 八 百 登 の 殿

世	廿	九	六	七	六	五	五	三	土	土
賢女	桂	檀	大	紙	依	妹	伴	按	勝	お
			の	依	仰	脊	賀	員	あ	本
繼	川	浦	茂	依	紀	山	然	邦	越	桜

すーやの腹
 勢古やのさん
 合邦内さん
 依津又の腹
 味と雀のさん
 上暖座のさん
 新茶やのさん
 女下中紀の腹
 兜穿紀三の腹
 道りのさん
 所居古の腹

新筆棚

クトキ

おまの道は東境を越つて
 つの乳ふふ七交結を婦と
 おまの境つて妹と云ひしる
 甲斐もなれぬの秋を現さる

愛母の稚子お愛わんのも
 されし逢ふてあはれとあふふ
 逢ふてあはれと今月とて飛
 びてあはれと逢ふてあはれと
 逢ふてあはれと逢ふてあはれと
 逢ふてあはれと逢ふてあはれと

笑別一

二膳境屋後

物ふの逢ふてあはれと
 逢ふてあはれと逢ふてあはれと
 逢ふてあはれと逢ふてあはれと
 逢ふてあはれと逢ふてあはれと
 逢ふてあはれと逢ふてあはれと

今にきく七世にさし
ていふと今よりぬ
ひかりはといふか
りふかぬかぬに
さまたるるに
あて

天
一

さふも入るる
す七のりもあつた
あもあもあつた
けきうも年の秋の
かきとあつた

つゝい後夜もまてら
まゐるにみづからまらひ

大伏魔殿

あゝの健もまてら
の可もあゝのねる

てよりえい極めてあか
るも甘めて人づい老の
きにかつてもたどひり
素はゆい極まらな
初づれのねる

病こととち年力年病
世の便つるをその言
世にさし抱く我のん
名にされ可きといふ毒
万病會かといふ何のふ

毒と人つて感て死で
金といふ所の物鉄也
乃か母状つること人
わう其まの流すまれば
果報の因果ありにじわ

かきううううううう
あううううううう
あううううううう
ううううううう
ううううううう

ううううううう
ううううううう
ううううううう
ううううううう
ううううううう

もきよふみきりん
とあつあつにみえも
無きといふくはみと
よふともみえみ
かきぬといふ奥のあそ

あつとてききりん
ほのきききききき
そふたきききき
いふといふききき
とてききききき

わも連てねるあな
あかあかともわいふ
あかあかへもあ
あかあかあかあか
あかあかあかあか
あかあかあかあか
あかあかあかあか
あかあかあかあか

あかあかあかあか
あかあかあかあか
あかあかあかあか
あかあかあかあか
あかあかあかあか
あかあかあかあか
あかあかあかあか
あかあかあかあか

天も海もさかたけり

一谷陣屋

車山麓をたふと切てなる
車かれ軍勢中の一隊
物に陣威ふもの車山

天ノ十

わりの海邊にさうと
近きとて健利なる武
士の車かれ軍勢中の一隊
車山麓をたふと切てなる
車かれ軍勢中の一隊
物に陣威ふもの車山

物^{モノ}の^ノひ^ヒと^トま^マし^シ波^ハし^シ物^{モノ}
こ^コま^マい^イと^ト物^{モノ}人^{ヒト}と^トる^ル
よ^ヨか^カう^ウむ^ムん^ンど^ド物^{モノ}あ^アる^ル
る^ルふ^フや^ヤう^ウと^トあ^アる^ル

あ^アる^ルま^マさ^サな^ナ

笑^{ウツ}ノ^ノ十^シ

あ^アひ^ヒま^マさ^サな^ナと^トあ^アる^ル
あ^アひ^ヒま^マさ^サな^ナと^トあ^アる^ル
の^ノれ^レあ^ア物^{モノ}や^ヤあ^アれ^レの^ノ死^シ国^{クニ}
あ^アも^モあ^アる^ルと^トあ^アる^ルい^イふ^フ考^{カウ}
あ^アる^ルあ^アる^ルあ^アる^ルあ^アる^ル

形さるるさるるさるる
は妹は後かみぬさる
ぬれぬぬぬぬぬぬ
ふぬぬぬぬぬぬぬ
後のかみぬぬぬぬ
天ノ十二

ふぬぬぬぬぬぬぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬ

か利き下しよりゆれか
 ひかりとれわ母と母と
 ぶあひとくまわさ
 のりきふりてらんふ
 藤るもたれあきさ
 天ノ十四

えつとゆきふこれ
 あふとあわむまき
 ゆきあひとあきさ
 天ノ十四

お条 聖濟お殿

そとふひ切利ともじり

何れとも切ぬ金つて
さうりうさゆ作ひ
ひかり就るれめと
て遊におもふあふ
まおもいさぬさう

天の十

あふ海より
禁じ候ひなふ
いじてもうわ
あわめれな
あふの相状と

ついでにさひねの袂の袂
お母さんなにかうけ

朝ぐら若屋

一とさう法の愛将の膝を
抱つてと人々を懐くもさ

天ノ十六

其の後の程いふ
おれもなるほつと
ふふはぬふのむひ
おれもなるほつと
浦とぬきとあつと

あひはてぬれ風
ゆるむく遠き
つまた風ふかから
玉ぬれ父母のさひも
ゆるまゐりまほ様ぞ

天ノ十七

あせとなを極て
くのまはてふ
あつてまゐる人あつた
極とまゐるまゐる
あひまゐるまゐる

関越とわふ道にゆわ
大津尾張とさるゐる
あふふ国とほむじわの
わ方もあふの法にさる
よあさうらむせいの

（天ノ十八）

想ひをを秘くの勢た
のを憐れゆと外を
あふあひて秋さける

お七八百屋

あふふこのお相やうく

毎時とある程と依り候も
 毎時とある程と依り候も
 毎時とある程と依り候も
 毎時とある程と依り候も
 毎時とある程と依り候も

天ノ十九

毎時とある程と依り候も
 毎時とある程と依り候も
 毎時とある程と依り候も
 毎時とある程と依り候も
 毎時とある程と依り候も

つもの煙草といちりさ

十本櫻さくら

私にまじりてはかしの煙
老婦とあらば今や
るるまのにまじりて

天二十

中法にあらば枝のま
性盛れど花のま
清くも花のま
りといひ初るま
父も母も花のま

あしてやうつたときれ
てぬきまをみふりた
れきりやのほろり
まふまふぬけい
あひまをわとせし
り

天ノ舟一

ゆけぬきまのきり
つとくまのほろり
あつとくまのほろり
つとくまのほろり

傳書 堀川

二五

老ひ過ぎもあはれに甘乳
小の虫は上にはきふの紋
中へ糸の縁ふき縁を帯
年十七初なるあふあふと
あふあふも乳のふくむと

天ノ子

あはれ過ぎもあはれに甘乳
小の虫は上にはきふの紋
中へ糸の縁ふき縁を帯
年十七初なるあふあふと
あふあふも乳のふくむと

彈三味線の通を町衆は
のるゑうと内小乳を様
様なものの面をさる
時イそとれとばんと整ふ
あれたるのあはれ面

天ノサエ

さるふ内とう御ひる
平の面をさる内
平の面をさる内
去年の秋七夕はあ
頃どめ付とあひ違ふ

秋

今部内ノ跋

[illegible]

癸巳

いふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふ

まづきぬの淵りも況まへ
こころをいひまへとあ
たしきれ浦へ船はる
かきわくかん根てふ後
とふてはくは後海の

伊賀越

いぬの淵りも況まへ
こころをいひまへとあ
たしきれ浦へ船はる
かきわくかん根てふ後
とふてはくは後海の

伊賀越
沼津

世に物もなかりて底も底も一止
な後あつたればいふことも
痛もみぬ物もささるも強
くもあつても解れをこの
をあらたき世にいふ

天ノ廿六

流浪もあつても底も底も
根芽もあつてもいひあつて
のりもあつてもいひあつて
えのりもあつてもいひあつて
かゝの流浪もあつてもいひあつて

あまのうみをひらけ
月国果とてあまの
もふ人のひけつ
かきあはしあまの
はふまはれはふま

29 天久保

わの秋の秋の秋
あまのうみをひらけ
あまのうみをひらけ
あまのうみをひらけ
あまのうみをひらけ
あまのうみをひらけ

ひそかに想ひつゝいふ
あはれ我らうやとて後
あはれさるま度あふと
あはれさるま度あふと
あはれさるま度あふと
あはれさるま度あふと

天ノ丸

あはれさるま度あふと
あはれさるま度あふと
あはれさるま度あふと
あはれさるま度あふと

上煖屋

あはれさるま度あふと
あはれさるま度あふと
あはれさるま度あふと
あはれさるま度あふと

今^のは^め枝^せの^つ葉^は上^の後^やわ
紙^し子^この^ま園^{えん}に^つ綿^{わた}の^し秋^{あき}の^あ
述^しび^び乳^{にゅう}母^ぼが^い孫^{ひこ}に^つ上^の後^やわ
妻^{さい}は^も現^{げん}ふ^もあ^のの^まれ
の^し敷^{しき}も^もあ^のて^のに^い孫^{ひこ}を^り

癸^{みづ}天^{てん}二^に午^ご

か^いん^んが^が依^いい^うう^うと^とさ^さう^うは^はと
孫^{ひこ}か^かい^いち^ちち^ちに^にあ^ある^る人^{ひと}も
あ^あら^らと^と秋^{あき}た^たり^り潮^{しほ}の^の海^{うみ}と^とあ^あり

紙^し治^ち茶^{ちや}屋^や

紙^し治^ちと^とあ^ある^る内^{うち}年^{ねん}祝^{しゆ}方^{ほう}に

廿二日 逆瀬よりいづる
ぬて今も不徳いふひも
けいも元一の秘方と云
さふも二年四年の仲
人なひなきていぬ元あり

天正二

五つ分よりいづる
くれぬるぬまふと云ふ
いぬるぬまふと云ふ
いぬるぬまふと云ふ
いぬるぬまふと云ふ
いぬるぬまふと云ふ

石内とあつたを田舎
 のお家

本藏上卷補

りんねふれとひこふ殿う
 ぢふりてとけいもひ遠

天竺
ノ三十五

次の新植のとき来ひしもの
 葉も物との怪あるお割
 中こそ海はなほけりあはれ
 廣園をう型うつる後交へ
 樹々の葉もあはれもほ

かものちうさちのたきあや
般のちの傍のてくと人目
おはのちをよれぬを痛む

壇浦兇軍記

後をよれぬを痛む

天ノ社

うりちのちのたきあや
うてのちのたきあや
うまのちのたきあや
うまのちのたきあや
うまのちのたきあや

廿
たのあよりぬるふせいのり

桂の道り

かえりての残りる種もか
のもよやあまのれにれあ
いあかそんひそか相勢あ

此の文は

あゝいあそなりいけとら
常はよあまの散れとる人
かゝるてあまのふりる人
かゝるてあまのふりる人
あゝいあそなりいけとら

んそぎみうそわ
可也のちみうそわ
わいんか前まへ
後をまわらね
ひんちとひん

笑ノ成

かかれうと人
ひんそとみうそ
されしとわ
可也れと人
ねちと人

とふ内かゝて甘まに
かんきと乳あやとちあ
かきれと何にもいせと
ひと悲しるまじと
まうのき仲のてらま

天正七

死と下入とあまき
あまきとあまきとあまき
あまきとあまきとあまき
あまきとあまきとあまき
あまきとあまきとあまき

[illegible]

汲用

らん華

とつまびのうがせ
みかりとせとせ

クトキ

其をかねて毒や子ふむ
 賜ていあらぬまにま

知るに可也歟といれふ
 殺^{ころ}すまのむ情^{じやう}ありて主殿
 れの机^きあ^うる^うの河^があ^うで
 うろく^うと可^う也^うや^うと^う
 うま^うす^うふ^う日^うに^うま^うあ^うの
 天^{てん}九^く

本^{ほん}い^いか^かま^まと^とう^うの^のう^うの^のう^う
 者^{しや}世^せの報^{ほう}ひ^ひと^と越^こえ^えは^はい^い
 あ^あは^はい^い

開元廿六年十一月廿日
 西宗

明治十九年八月六日出版御届
明治廿六年七月一日訂正増補印刷
明治廿六年七月七日發行

校閱 豊澤松太郎

著作者

寺澤久萬七

大阪市西區新堀南通二丁目
二番屋敷



發行兼
印刷者

大阪市南區鰻谷中之丁

加島屋清助



